「2021 年度前期　授業に関するアンケート」集計結果

実施期間：2021 年 7 月 24 日（土）～2021 年 8 月 6 日（金）
実施対象：全学部生
回答数：771 件（在学者総数 2170 名、回答率 35.5%）

【全回答（771 件）に占める割合】
理学療法学科　103 件（13.4%）　　看護医療学科　174 件（22.6%）
健康栄養学科　140 件（18.2%）　　人間環境デザイン学科　65 件（8.4%）
現代教育学科　289 件（37.5%）

【全回答（771 件）に占める割合】
1 回生　303 件（39.3%）　2 回生　195 件（25.3%）　3 回生　174 件（22.6%）
4 回生以上　99 件（12.8%）

3. 2021年度前期のあなたの授業スケジュールはどのような形でしたか？

詳細

対面授業が多かった（223 件） / 遠隔授業が多かった（305 件） / 対面授業と遠隔授業が同じくらいの割合だった（241 件）

4. 2021年度前期のあなたの授業による登学日数はどれぐらいでしたか？

詳細

週 1 回以下（89 件） / 週 2 回（177 件） / 週 3 回（222 件） / 週 4 回以上（282 件）

5. 上記の登学日数はあなたにとってどう感じられましたか？

詳細

多かった（218 件） / ちょうど良かった（425 件） / 少なかった（120 件）

6. 対面授業を受講して、遠隔授業よりも良かったと感じた科目は、どのような科目ですか？

7. その理由を教えてください。

設問 6 には 656 件、設問 7 には 629 件の回答がありました。

理由として多く挙げられていたのは「実技などを伴う授業なので、遠隔ではなかなか身につかない」「友人同士のグループワークを行うことで理解が深まる授業だから」「先生への質問がしやすい」「教室に出て授業を受けるほうが集中できる」などでした。

なお、具体的に名前が挙げられていたのは、以下のような科目でした（上位 5 つ）。

1	キャリア入門セミナー（42 件）
2	スポーツ実習 A（33 件）
3	人体構造・機能学Ⅰ（26 件）
4	臨床栄養学（20 件）
5	看護技術基礎論（17 件）

8. 対面授業を受講して、遠隔授業のほうが良かったと感じた科目は、どのような科目ですか？

9. その理由を教えてください。

設問 8 には 579 件、設問 9 には 511 件の回答がありました。

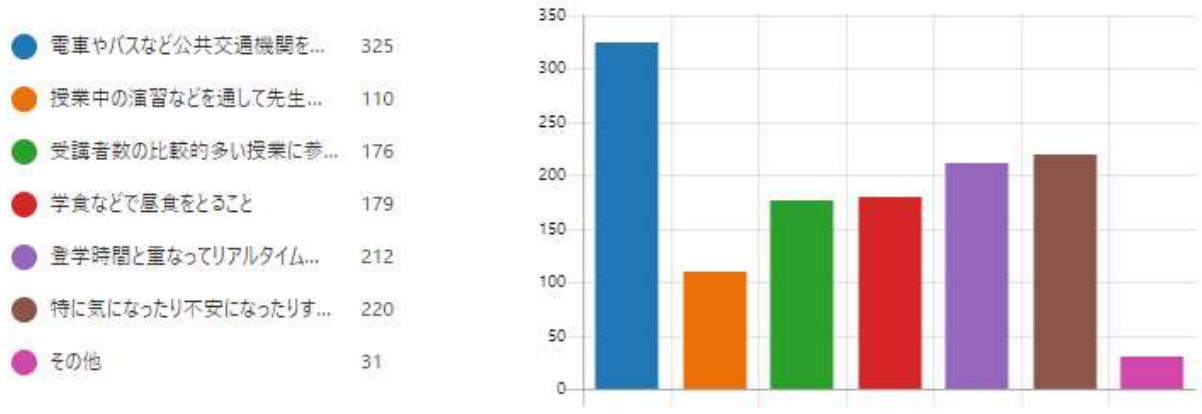
理由として多く挙げられていたのは「わからないところを何度も見返したりすることで理解を深められる」「自分のペースで学修を進められる」「遠隔授業でも対面の時と同じような内容の授業を行ってもらえた」「コロナ感染のリスクを抑えられる」などでした。

なお、具体的に名前が挙げられていたのは、以下のような科目でした（上位 5 つ）。

1	情報処理演習Ⅰ（26 件）
2	体育科概論（21 件）
3	キャリア入門セミナー、調理学（17 件）
4	人体構造・機能学Ⅰ（14 件）
5	保健医療福祉システム論Ⅰ、精神看護学対象論、英語コミュニケーション（13 件）

10. 対面授業を受講するにあたって、特に気になったり不安になったりしたことはありますか？（複数回答可）

詳細



電車やバスなど公共交通機関を使って登学すること（325 件） / 授業中の演習などを通して先生や他の学生と近く接すること（110 件） / 受講者数の比較的多い授業に参加すること（176 件） / 学食などで昼食をとること（179 件） / 登学時間と重なってリアルタイム参加型の遠隔授業に参加しにくくなること（212 件） / 特に気になったり不安になったりすることはなかった（220 件） / その他（31 件）

11. 設問10で「その他」を選択した方は、具体的にお聞かせください。

設問 11 には 31 件の回答がありました。

内容として挙げられていたのは「限られた時間の対面授業だけのために登学することのしんどさ」「対面授業と遠隔授業が同日に入ることで時間の調整が難しくなる」「特にラッシュ時と通学時間が重なる場合の不安」などでした。

12. コロナ禍が収束した後の対面授業と遠隔授業の使い分けや、効果的な併用の方法について、何か意見があればご自由にお書きください。

設問 12 には 316 件の回答がありました。

この設問に回答してくださった皆さんの６割以上が、現在の「対面授業と遠隔授業の併用」というスタイルの継続を望んでおられるようでした。コロナ禍が依然収束の気配を見せていないことに加えて、特に昨年度当初、遠隔授業の課題として挙げられていた「課題の分量が多すぎる」「フィードバックのない科目がある」「先生に質問がしにくい」といった点が改善されてきたことも大きな要因といえそうです。ただし、そうした中でも「対面授業と遠隔授業の実施される日や時間帯をもう少しまとめられないか」「対面授業と遠隔授業を学生自身が選択して受講できるような時間割編成は不可能か」といった意見が寄せられています。

【総評】

はじめに

従来、授業といえば対面授業を意味することが当たり前になっていましたが、コロナ禍の下、昨年度以降この様相が一変しました。手探りの状態ながら、多くの授業科目が対面授業から遠隔授業にシフトされることを余儀なくされたことは、ご存知の通りです。

この状況を受けて 2021 年度前期の「授業アンケート」は、昨年度同様、遠隔授業を中心テーマにした設問になりましたが、設問内容は昨年度行なった 2 回のアンケートとは若干異なっています。これは、新型コロナウイルスの感染拡大の影響との関連で、何度か変更になった授業形態の経験を踏まえたものではありますが、同時に今後の授業についてのあり方をも問う内容になっています。

コロナ収束後の来るべき「ニューノーマル」の時代のなかでは、大学においてどのような授業が望ましいのか、そして一体未来の大学はどのようであるべきなのか、をも考えさせてくれる大変興味深い回答結果となりました。

今回のアンケートの回答数(771 件)、回答率（３５．５％）をとってみれば、前回、前々回に比較して、必ずしも高い回答数、回答率とは言えません。無回答者が６０％以上存在することは無視してよいわけではありませんが、自由記述欄などを読んでみると、学生の皆さんが、授業について、ひいては大学について、この時期の経験を基に自分の考えていることをぜひ知ってもらいたいという熱いメッセージを示してくれているように感じました。

これらについて、設問順に少し子細に検討してみたいと思います。

設問 1(所属学科)、設問２(学年)について

ここで最初にお断りしておきたいのは、このアンケート結果は全体としての傾向を表わすものにすぎないということです。授業の形態を問うことは、授業科目の性格によって大きく異なり、また学科によっても異なっています。もっと細かく言えば、同一の科目であっても、複数の担当教員の場合は、各教員によって変わってくることでしょう。教員の方も昨年度の授業の経験を活かし、また使用する機器への扱いにも徐々に慣れてきたことから、当初より操作等にまつわるトラブルは減少しているようです。加えて、今年度 2 回生のように、入学当初から、想定してなかった遠隔授業を余儀なくされた学年と、通常の対面授業を経て遠隔授業と対面授業のハイブリッドな形態を経験した 3 回生や卒業年次の学生にとっては授業に対する思いや考え方は違ってくるのも当然のことでしょう。学科ごとの分析や学年ごとの分析が今回はできませんでしたが、いずれ、今後この面も含めて分析ができればよいと思います。

設問３(授業スケジュール)について

受けた授業形態を大まかに選んでもらった回答は、興味深いことに、この時期であっても「対面授業が多かった」と回答したものが 223 名（２８％）に上ったことは記憶していいと思います。これは、この状況下にあっても、対面授業を待望する学生の声に大学が応えた面もあることでしょう。

設問４（登学日数）について

「1 週間に何日登学したか」という設問への回答は、さらに興味深いものです。前期期間中は対面と

遠隔の授業の二本立てで行われたわけですが、回答者の学生の最も多く登学した日数は週４回以上でした。これは全体の 36%を占めています。これと週３回と答えたもの（２８%）とを合計すると、１週間に３日以上登学したものは、64%にも上ります。この数字を見る限り、学生たちは普段とあまり変わらない登学の日数だったことを示しています。

設問５(登学日数についての感想)について

同様に興味深いことは、この回数についての感想です。この日数を多いと感じるか、少ないと感じるかは、それぞれの学生の感じ方にもよるでしょうが、「多かった」（29.6%）「少なかった」（15.9%）を押さえて、「ちょうど良かった」と答えたものが最も多く(55.7%)を占めたことは、特筆に値します。この数値が、週４回登学の学生の回答を必ずしも反映したものとは思わないものの、６割近くの回答者が、このコロナ禍においても、キャンパス生活におおむね満足していたことを示しています。

設問６～設問９(良かった対面(あるいは遠隔)授業科目名とその理由)について

この項目もとても興味深い結果でした。どちらの方式に対しても、ほぼ同じくらいの数の肯定の回答が集まりました。これは、あらためて対面授業の良さを再認識にすることにつながることにもなりますし、新しく登場した遠隔授業の良さを発見することにもなりました。いずれにしても、授業とは何かを考え直すきっかけを作ってくれた点で大きな意義を持っています。

自分の身体を使って学んでいく実技系の科目(実験、実習、音楽や体育など)は対面授業が不可欠でしょう。また、コミュニケーションという観点からも、教員への質問のしやすさや、学生同士のグループワークなどは、確かに対面授業の方が向いていると思われます。対面授業の醸し出す、自分もそこに参加しているのだという緊張感や臨場感の重要性をあらためて再認識した学生もいるようでした。

他方、遠隔授業の良さについては、意外と言えばいいのかどうかわかりませんが、少なくない支持が集まりました。いつでも、どこでも、繰り返し視聴できることのメリットは、はかり知れないことでしょう。ただ、遠隔授業支持のなかには、動画の資料を提供するのみの科目や同じ話を繰り返す科目などに対して、「対面で受講する必要性が感じられない」という否定的な理由から遠隔授業を良しとした意見もあったことは、記しておきます。今一度、授業を対面で行うことの意味を教員の側が考えなおす必要性があると思います。

教員と学生の直接のコミュニケーションの形式を尊重するゆえに、対面授業の科目を推すものもいれば、他方で、先に述べたように、繰り返し聞き返すことで理解を深められる遠隔授業ならではの利点を強調する回答もありました。これらは、勿論科目の性格に依ることが大きいです。

ところで、対面、遠隔の双方の利点を活かした具体的な科目名をあげる設問に対して、興味深い回答がみられました。それは、対面、遠隔の授業の良かった科目のなかに、どちらの方にも上位に「キャリア入門セミナー」「人体構造・機能学Ⅰ」が入っていることです。詳しい分析はできませんが、特に、「キャリア入門セミナー」は、全学科の１回生の必修科目として提供されている科目であり、学科ごとに担当教員や教育内容は異なるものの、学科の要望を基にそれぞれの教員が、対面同様、遠隔授業においても、それぞれの特性に応じた授業内容と方法に工夫が凝らされているためにこのような結果になったのではないかと推察できます。

加えて、同一の科目のなかにどちらの方法においても、メリットを見出すことができたということも考えられます。同じ内容を繰り返し視聴することで身につける、いわば知識を身体化していく方法を重視する人であれば遠隔授業の方を好むでしょうし、他方、その場にいて、実際に担当教員の声や身振り

を含めて学んでいく臨場感を重視する人なら、対面授業が良いと思うことでしょう。このことは、たとえ、同一科目、同一の担当教員であっても、受講する学生各人によって、多様な学び方がありうることをも示唆しています。

設問 10　設問１１(対面授業の問題点とその理由)

この設問は、当然のことながら「コロナ禍の状況において」という但し書きがつくのですが、圧倒的に多い回答は、「電車やバスなどの公共機関を使って登学すること」でした。「特に気にすることはなかった」と答えたものが次に続いています。「リアルタイム参加型の遠隔授業に参加しにくくなること」もこれに続いていますが、コロナ感染の不安という点からは、授業や学食でのソーシャルディスタンスの取り方に敏感であったことがみて取れます。

設問１２　(コロナ禍の収束後の授業のあり方)

本文の分析でも書かれているように、回答を寄せられた皆さんは、コロナ禍が収束した後においても、「遠隔授業と対面授業の併用」が望ましいと考えています。これは、本学だけの特徴なのかどうかは、他大学の同様のアンケートを比較しないと何ともいえませんが、少なくとも本学の学生の回答者は、対面授業に戻りさえすれば問題が解決したとはだれも思っていないことがよくわかります。

また、当初の遠隔授業に関わる不慣れな感覚が徐々に除去されてきて、また方法も手際よくなされるようになってきたことから、学生、教員双方が上に述べたような利点にあらためて気づき始めていることも、遠隔授業のポイントを上げている一因であることも確かでしょう。

まとめに代えて

あらためて言うまでもないことですが、大学というところは、教える人と教えられる人の授業だけで成り立っているのではありません。少なくとも学生からみれば、学生どうしが学んだり、クラブ・サークル活動をしたり、図書館に行ってレポートを仕上げたり、好きな読書に没頭することも、大学での学生の持つ特権的な醍醐味です。従って、大学という場を遠隔授業のみに特化してバーチャルな空間に替えてしまうことは、誰よりも学生自身が望んでいないということが本アンケートからもよくわかります。

だとすれば、対面授業と遠隔授業の双方の良さを認識しながら併用する制度設計が今後の進む方向性と考えられます。但し、そのためには、制度面、運用面での様々な問題をクリアしなければなりません。１時限の対面授業のために通学して、その他の時間を大学のなかで遠隔授業を受けるといった愚は避ける必要があります。今後のコロナの感染状況を考えながらも、受講する学生にとって最も効果的な学習の方法を探求するために、本アンケートを有効に活用していきたいと思います。

(教務委員長　前平泰志)